

娘支える「ソフリエ」

ウーマノミックスの明日

男性が変わる

孫育てに積極的な祖父らを指す「イクジイ」が活躍している。働く娘を支え、地域の子どものために育成に尽力する姿に、女性の活躍を後押しする存在として期待が高まっている。

「おかえり」。北九州市の会社員和田峯寿敏さん(60)宅で、仕事を終えた母親を玄関で出迎えた孫がうれしそうに駆け寄った。和田峯さんは、帰宅が午後7〜9時になる会社員の娘木原千寿さん(31)夫妻の息子秦志くん(2)を平旦の夕方に預かっている。千寿さんは「フルタイム勤務に戻り、兄や母も含め家族の協力なしでは仕事が続けられない」と話す。

秦志くんが誕生する2カ月前の

頼れる祖父世代

2012年2月、和田峯さんは同市で開かれた孫育て講座を受け、育児の基本的な知識や技能を習得した祖父として「ソフリエ」に認定された。自身も共働きで、子育てにも積極的だったが、おむつ替えやお風呂の入れ方をおさらいし「孫育てへの自信を深められた」と語る。実際に秦志くんのお風呂も担当する頼れるソフリエだ。

講座を企画したのは、自治体や企業の育児支援策の調査・研究をするNPO法人「エガリテ大手前」。06年の孫育ての調査で、60代以上の男性の多くが孫育てへの参加を望んだ一方、団塊の世代を中心に、仕事で家庭を顧みなかったことへの不安から、娘世代(20〜40代)の女性の82%が「孫育ての研修が必要」と回答したのがきっかけだ。

古久保俊嗣代表(60)は「右肩上

他人の孫 地域で育てる

がりの時代だった祖父母世代と違い、今は経済的にも共働きが当たり前。子育てをやってこなかった祖父も、積極的に孫育てに関わるべきだ」と指摘する。自治体の関心も高く、エガリテ大手前の講座は全国で開かれている。

他人の孫「たまご」の育ちを地域全体で支える動きもある。千葉県柏市の市民団体「多世代交流型コミュニティ実行委員会」が取り



平日夕方に自宅で孫を預かる和田峯寿敏さん(4月、北九州市小倉北区

組む「地縁のたまご」は、高齢者が将棋や手芸、餅つきなどの趣味やイベントを通じて地域の子とも顔見知りになり、健全育成につながる活動だ。

かつては仕事人間で、子育てや地域活動に消極的だったという常野正紀代表(73)が、退職後のボランティア活動を発展させた。「この地域は3世代が同居する家庭は1割程度で血縁だけでは子育ては無理だ。地域全体を一つの家族として支えたい」と常野さん。子育てにゆとりや安心感がなければ、女性の社会進出は難しい。

常野さんは「男性は名刺と肩書が取れたら家にこもりがち。地域の役割をもっと担い、たまご育てに参加してほしい」と話している。

◇ 経済再生の切り札として、安倍政権は女性(ウーマン)の力で経済(エコノミクス)を活性化させる「ウーマノミクス」に期待を寄せる。女性の活躍を支える男性側の変化に注目した。